

## ～定年退職後のりんごづくり挑戦記録～ 「団塊アグレンジャー2号の奮戦記」

### 2012 いよいよふじの収穫（最終章）

今年りんごの販売をお願いしている五所川原市の青果会社の専務は、午後の一服の最中に笑顔で園地に入ってきた。その日の朝に市場で競りにかけられた我が農園のりんごの仕切り書が握られている。「お父さん、ボーナスですよ。」と誇らしげに手渡す。いくらで取引されたのか、そっと仕切り書に書かれてある金額に目を落とす。なんと、なんと、今年はりんごの相場が一段も二段も高くなっているとは聞いていたが、まさか。思いもよらぬ価格である。口をあぐりさせていた収穫応援部隊の賑やか軍団が、わずかの間をおいて再び湧き上がった。20キログラム入りの一箱が5000円を超えるものもあったのだから、無理もない。切り上げ（収穫仕舞いの振舞い）は奮発してもらえると軍団一同の期待が高まる。「黒石市M食堂の見たことのないほど大きなえびフライ定食がいい」「なんもラーメンの出前で十分だ」「コンビニの弁当でもたくさん」とか。みんながまちまちだ。親戚だから遠慮もない上、とにかくよく喋る家系だからなお更に賑やかだ。

「我が家のりんごが競りにかけられた時にちょうど複数の業者が競り合いになり、高価格で、売り渡された。お父さん運がよかったよ。」と専務は小鼻を膨らませながら解説してくれた。これが素人ほどツキに恵まれることがあるというビギナーズラックか。

この地でりんご作りを始めたのは、私の祖父の代からなので、3代目である。祖父の時代は、馬車にりんごを積んで町に販売にいくと帰りには空箱に札束を入れて帰ってくる好景気の時期もあったと聞いた。りんご農家が最も威勢のよかった頃かも知れない。今住んでいる築76年の自宅は祖父とその子供たち（私にとってはおじ、おば）がりんごで儲けたお金で建てたと聞いている。当時忒千円ほどかかったそうで、3代目の私は今なおその恩恵に与っていることになる。

しかし2代目はそうはいかなかったようだ。特にひどかったのは山川市場と言われた昭和43年。主力品種の紅玉、国光を山や川に投棄せざるを得ないほどに価格が暴落した。この頃ちょうど私の大学進学にぶつかったのだから、2代目

の私の父や母は生活費の仕送りにどれだけ苦労したことか。いくら感謝しても感謝しきれないくらい有難く思っているのだが、今は二人ともこの世にはいない。せめてりんご園を守ることが私の出来る恩返しだ。

選果に手間取ったことは以前に述べたが、もう少し詳しく我が園地の事情を説明しておかなければ。

りんごの大きさ、色の付き具合、品質などを総合的に判断して選果するのが、7種類に分別する。上物（色づきが良く、大きさも程よいもの）、小玉（文字通り玉が小粒なもの）、二番手（色づきに若干難あり）、ハネ（果実表面の擦りキズやつるわれなどの障害果）、青実（色づきが極めて不良）、加工用（生食に適さないもの）、ピンコ（小玉よりも一回り小さい生育障害果）の7種類に分類している。これを一個ずつ繰り返す。大まかに計算すると10万個以上のりんごを手作業で分別していることになる。感度不良の人間センサーによる選別だから時間を要するのも無理はあるまい？ こうして市場に出荷されるのだ。二番手が4000円近い価格で取引されたのだ。

青果会社専務曰く「この仕事をするようになって19年になるが、今年のような年は初めてだ。全国りんご産地はいずれも不作で、りんごの品薄感が強い。青森県でも40万トンを下回るくらいの不作になっているのではと市場関係者はみているようだ。とにかくこんなことは経験がない。」

こうした賑わいの中、収穫作業は順調に進み、7日間、総人員66人を費やしたふじの収穫が終了しました。

収穫仕舞いは全員で特製のエビフライにかぶりついた。その光景はささやかながらも収穫の喜びを分かち合うのに十分なお馳走でした。

今、園地はすっぽりと雪に覆われています。賑やかさはすべて雪が吸い尽くし、静かさが支配しています。りんごの樹は疲れを癒す長い休息に入っているのです。しばらくはそっとしておいてやりましょう。



雪に覆われたりんご園

2012年1月25日

